祈りの言葉

水俣病犠牲者慰霊式にあたり患者、遺族を代表して祈りの言葉をささげます。

水俣病は今年で公式確認７０年の節目の年になります。これまで様々な出来事が繰り返されて来ました。水俣病によって、大切な家族を亡くしたり自ら健康被害を受けたり、差別や偏見、そして地域の分断など世界に類を見ない公害を私たちは経験してきました。

私たちが経験した水俣病は今もなお差別や偏見そして救済問題など簡単に終わることのできない重大な出来事です。怒りや不満をならべれば言いつくせないほど長い人生を私自身経験してきました。私はその怒りと不満を乗り越えて今日ここに立っています。

水俣病犠牲者慰霊式での名簿奉納は、長年にわたり認定患者に限るとされておりましたが、実行委員会や関係者の皆様の努力とご理解があり、令和５年から無記名プレートにて全ての被害者を対象とした奉納が実現できました。こ

のことはもやい直しの歴史的な大きな前進であると確信しております。

　これまで７０年の間、行政や学校教育そして多くの人たちの努力によって、現在では水俣病への差別や偏見は以前と比べるとずいぶん少なくなってきたように思います。

　私自身、公式確認の翌年１９５７年水俣から北へ１５キロ離れた芦北町女島の緒方家に生を受けました。当時、緒方家は漁業を職業として地域の人たちと共に、日々不知火海に出て主にカタクチイワシを水揚げしていました。私が生まれ育った女島は対岸に天草の島々が一望でき、晴天の時は高台に立てば長崎の雲仙がかすかに望めるとても自然豊かな場所です。

　１９５９年９月、同居していた祖父福松が原因不明の症状を発病し２ヵ月後に苦しみもがいて亡くなりました。その後、急性劇症型のメチル水銀中毒だったことが判明しました。当時の湯浦町で最初の犠牲者でした。２歳違いの妹は胎児性患者としてこの世に生を受けて、まさかの人生を強いられました。

１９６０年熊本県が調査した毛髪への水銀含有量検査では私自身も２歳の時、２２６ＰＰＭの水銀が検出されていて、濃厚なメチル水銀中毒を受けています。しかし当時は水俣病被害者への偏見差別があり認定申請などできず、まして長期にわたり水俣病と向かい合う勇気などなく、認定申請も自ら拒んでいました。

そういう中、１９９５年政治解決が行われました。３８歳になった私はみんなと一緒に自分の水俣病に一つの区切りをつける目的で覚悟を決めて政治解決に申請しました。しかし行政はこの解決策で私に救いの手を差し伸べてくれることはありませんでした。切り捨てられた思いになり、あきらめることのできなかった私は裁判でなく、公害健康被害補償法に基づく認定申請を１０年間繰り返しました。当時、おさえきれない社会に対する怒りが続きました。

そんな時、ある言葉を思いだしました。私は２０歳になって生まれ育った女島から、建具職人を目指して水俣の建具店に修業に入りました。私を育ててくれた今は亡き師匠

が最初の日に私に言った言葉があります。

「人間には、間違いや失敗がつきものである。ただ、その失敗をけして失敗で終わらせてはならない。その失敗に対して深く反省すれば必ず前進がある。失敗は成功の基と言うだろう。」と話してくれました。その言葉を大切にして、私は１０年間の修業を経て３０歳で独立し、現在の水俣市月浦で建具店を経営し日々ものづくりに励んでいます。建具職人を目指してから５０年近くになります。漁業一家から建具職人の道を選んだことは、緒方家一族が水銀被害に遭ったことがきっかけのひとつだとしても、私は今の自分の人生に悔いはありません。

１０年間の自身との闘いを経て、私は２００７年３月１５日に２２６６番目の水俣病患者認定を受けました。同時にチッソ株式会社、そして当時の潮谷義子熊本県知事から心からの謝罪を受けました。私を人として救ってくれた潮谷さんは、それまでの怒りと不満の人生を希望への人生へと導いてくれました。人を信じ続けたことは間違いではなかったと今でも思っています。

２００７年９月、私は水俣病資料館の語り部となりました。水俣に学ぶ肥後っ子教室で水俣を訪れる熊本県内の小学校５年生を中心に事実と真実を語り続け２０年近くになります。

また、昨年水銀から学ぶ取り組みをしている地元の水俣高校生と出会いました。先日、手作りの記録集を届けてくれました。私たちが学生の頃は水俣病に目をそむけ、決して向き合うことなどなく、ほとんどが苦しみの記憶しかありません。７０年たった今、行政や多くの人たちのこれまでの努力もあり、起きた出来事と正面から向い合い、そして自ら学び教訓を社会に発信している水俣高校生の姿に市民として感銘を受けました。

そして、昨年に続き令和８年度のＪＮＣ新入社員の皆様に、研修会の中で語り部講話が実現しました。加害企業と被害者の壁を超えて人として向かい合い、私の胸の内をうちあけることが出来ました。水俣病を学び会社のこれからの発展につなげたいと言う目的はとても素晴らしいことだと思います。

水俣は２０１３年、水銀に関する水俣条約を教訓としてこの水俣から世界に発信することができました。

水俣条約によって問われているのは、水銀の削減という現象的なことだけにとどまらないと思います。「人間の心」が問われていると、私は思います。正直に間違いを認めることができない人間の心、傷つき殺されていく人々を家族だと思わない人間の心、そして声を上げることさえできずに倒れていった人々、この世に生まれるはずだった多くの命、魚や鳥などの奪われた数多くの命を、なかったことにして忘れてしまおうとする人間の心が、問われているのではないでしょうか。

私が思う水俣病の真の解決とは、全ての人たちが起きた出来事と向かい合い心から反省をし、教訓につなげることができた時だと思います。

「反省とはけして悔やむものではない。反省とは前進するための土台作りである」と言う言葉があります。水俣病問題は人間が起こしてしまった出来事ですから私たちの努力で問題を解決し、次世代の子供たちに水俣病を教訓と

して伝えたいと思います。

　水俣病で失われた全ての生命に対して、ご冥福をお祈りすると共に、お一人お一人の貴重な人生を無駄にしないことを今日ここにお誓い申し上げ祈りの言葉と致します。

令和８年５月１日

患者、遺族代表、緒方正実